

I 科学館の沿革・運営方針

1 沿 革

昭和27年6月、主として学校教育における理科教育の充実を図るため、現在の錦町公園東側にあったレジャーセンター内にサイエンスルームを開設した。この運営については、東北大学の教授を運営委員とし、その指導のもとに市内の中学生を対象として、理科の本質の原理にふれられる実験を中心に実施してきた。この事業は今日まで一貫して続けられており、全国でもその先鞭をつけたものとして高く評価されている。

このような経過の中で、従来のサイエンスルームを発展させ、展示室を新たに併設して、昭和43年5月、青葉通り東二番丁角の長銀ビル地下一階に仙台市科学館が開館した。

以来、展示学習、学校教育、生涯学習の諸活動を通して広く市民に親しまれ、知的、文化的要望に応えながら、市民文化の向上に寄与する一翼を担ってきた。

しかし、場所が地下であることや、スペースが狭く、科学技術のめざましい進歩に対応した展示ができないことなど、運営に支障を来すようになった。また、生涯学習の視点に立ち、幼児から高齢者まで、自己に適した手段・方法で科学の学習ができるような教育環境の整備が必要となってきた。これらのことを踏まえて、これまでの諸活動を継承しながら新しい発想のもとに新科学館として、空間的機能的立地条件を満たす環境へ移転することとし、昭和59年、移転新築のため基礎調査を開始し、台原森林公園内に新科学館を建設することを決定した。その後、科学館基本構想策定委員会の報告を受け、昭和63年に建築工事に着手し、平成2年5月建築工事竣工、同年9月に新科学館が開館した。

以来、科学館学習に展示学習や選択制を導入したり、館内コンピュータネットワークを構築したりするなど機能の充実に努めてきた。平成9年、科学館協議会から展示更新の必要性の答申を受け、平成10年「誰もが楽しめる科学館」をコンセプトに「展示学習推進計画」を策定し、事業を推進してきた。平成11年、新展示の実施設計書を完了させ、本格的な事業を開始し、平成12・13年度に38の独創的なアイディアの新展示を製作した。また、平成11年からは市民ボランティア「サイエンスインタプリタ」を導入するなど、時代の趨勢に適合した学社融合の科学館として活動を続けてきた。

平成23年3月11日、東北地方太平洋沖地震が起き、津波被害も相まって東日本を中心に甚大な被害にみまわれた（東日本大震災）。当科学館でも施設、設備や展示物に深刻なダメージを受けたが、職員一同一丸となって復興を目指し、平成23年夏の特別展（トリックアートと3D感覚展）では史上最高の入館者数(68,819人)を達成した。

令和5年10月から、4階自然史系、理工系展示室の改修が始まり、令和6年4月に「宮城・仙台の自然」、「科学の探究」エリアとしてリニューアルオープンした。令和6年10月から3階生活系展示室のリニューアルを開始した。

仙台市科学館年譜

昭和27年 6月	サイエンスルーム開設 実験指導開始（科学館学習）
昭和29年 3月	サイエンスルーム時報第1号（年報） 発刊
昭和29年 9月	第1回仙台市児童生徒理科作品展開催
昭和43年 9月	仙台市科学館開館（実験室2，展示室1）
昭和60年12月	科学館基本構想策定委員会設置
平成 2年 9月	新仙台市科学館開館（開館日9月27日）
平成 2年11月	科学館学習に「展示学習」導入
平成 3年 4月	館内コンピュータネットワークシステム完成
平成 3年 7月	科学館学習にコンピュータ活用開始
平成 3年 9月	仙台市科学館研究報告1号発刊

平成 4年 4月	サイエンスショー開始
平成 5年 4月	科学館学習選択制導入
平成 5年 9月	ひまわり雲画像システム完成
平成 7年 5月	展示学習にマークシート方式導入
平成 8年 4月	インターネットホームページ開設
平成 9年 6月	科学館友の会発足
平成 9年 9月	科学館協議会答申 仙台市科学館の運営について
平成10年 3月	飛行コーナー開設
平成11年 3月	展示学習推進計画スタート
平成11年 5月	マルチメディア機器設置
平成11年 6月	サイエンスインタプリタ制度導入
平成12年11月	対面型実験工房チャレンジラボ開設
平成13年 3月	仙台の発明宝箱, 化学の不思議な世界 インターネット・ロボ開設
平成13年 9月	科学館協議会答申～21世紀を拓く科学館活動のあり方について～
平成14年 3月	展示更新完了 環境アトリエ, 地震体験装置グラリくん, 船形連峰のブナ, 仙台平野に渡るガン, 海藻がいっぱい, 光のアンサンブル開設
平成14年 3月	開館50周年記念講演会 日本科学未来館館長で宇宙飛行士の毛利衛さんをお招きし記念講演会「宇宙からの贈りもの」開催
平成16年 4月	田中耕一氏ノーベル賞受賞記念展示物設置
平成17年 1月	西澤メダル創設記念展示物設置 2002年, 米国電気電子学会において, 西澤潤一博士の業績をたたえ, 「西澤メダル」が設置されました。西澤博士よりこの「西澤メダル」のレプリカが仙台市に寄贈されました。
平成18年12月	気象観測ネットワーク「お天気アイ」始動
平成20年 2月	仙台市こども宇宙館の閉館に伴い, 展示物4種移設 (テレビ電話, ジャイロをかたむけてみよう, オーロラを観測しよう, フーコーの振り子模型)
平成21年 2月	ゾウ類標本3体, 現生貝類標本設置 ナウマンゾウ (レプリカ), アフリカゾウ, アジアゾウの骨格標本, 日本近海の現生 貝類標本を (財) 斎藤報恩会より寄贈
平成23年 3月	東日本大震災 るねっサイエンス事業
平成23年 7月	特別展(トリックアートと3D感覚展)で史上最高の入館者数 (68,819人) を達成
平成25年 7月	特別展「元素の世界」を開催
平成26年 7月	特別展「恐竜大研究」を開催
平成27年 7月	特別展「体感! スポーツ研究室」を開催
平成27年 9月	恐竜骨格標本などが一般財団法人斎藤報恩会より寄贈
平成27年12月	地下鉄東西線仙台駅に化石展示コーナーを設置
平成28年 7月	特別展「見て! 触って! わくわく昆虫館」を開催
平成29年 5月	入館者数500万人達成
平成29年 6月	SENDAI FREE Wi-Fi開通 サービス開始
平成29年 7月	特別展「科学捜査展」を開催

平成30年 7月	特別展「恐竜最前線」を開催
平成31年 3月	館内ネットワークシステム更新
令和 1年 5月	科学館学習においてタブレット端末を用いた展示学習を導入
令和 1年 7月	特別展「地球と地震 48のひみつ」を開催
令和 2年 7月	特別展代替イベント「トリックアートでまちめぐり」「佐藤長明写真展 南三陸 海の生きものたち」「夏の特別科学教室」の実施 (特別展は新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止とした)
令和 3年 7月	特別展「アリスの不思議体験ツアー」を開催
令和 4年 7月	特別展「くらべる図鑑展」を開催
令和 5年 7月	特別展「化石動物園」を開催
令和 6年 4月	4階展示室の全面更新完了 エリア「宮城・仙台の自然(大地の記憶、見方の森、自然への入口)」、エリア「科学の探究(サイエンスユニット、物質のなりたち、波・音・光、電気と磁気、運動と力、エネルギーの利用、物質の性質)」
令和 6年 7月	特別展「恐竜最前線2024」を開催
令和 7年 4月	3階展示室の全面更新完了 エリア「生活と科学〜ワンダーサイエンスルーム」

I 科学館の沿革・運営方針

2 運営方針

仙台市科学館は昭和 27 年 4 月、学校教育における理科教育の充実を図るために、当時錦町にあったレジャーセンター内にサイエンスルームとして設置された。平成 2 年 9 月には、市制施行 100 周年記念事業の一環として現在地に新築移転するとともに、基本理念と基本方針をあらたに制定し、これに基づきこれまで事業運営を行ってきた。これまでの基本理念と基本方針は制定後すでに 20 年以上が経過しており、制定当時と比べ社会状況や市民のニーズには大きな変化が認められている。このことから当館では平成 23 年 2 月 19 日に仙台市科学館協議会に基本理念と基本方針の見直しについて諮問を行ったが、平成 23 年 11 月 5 日に「仙台市科学館運営の基本理念（基本方針）の見直しについて」として答申がなされた。

〔基本理念〕

仙台市科学館はこれまで、社会教育施設としての充実を図るとともに、学校教育とも積極的に連携を深めながら、東北の中核都市にふさわしい科学系博物館を目指し機能の強化に努めてきました。今後とも、創造性を培うための研修の場・学習の場・憩いの場として市民の多様なニーズに応えられるよう次に掲げる機能の充実を努め、高度な機能を備えた総合的で、かつ、開かれた科学館をめざします。

- (1) 理工系・自然史系・生活系を中心とし、博物館としての機能を充実させた科学館
- (2) 参加体験型の展示を通して科学の原理法則にふれることができ、創造力をよび起こすことのできる科学館
- (3) 郷土の自然の大切さを知り、環境を保全することの重要性を学ぶことのできる科学館
- (4) 児童生徒への効果的な理科教育を実践し、教育現場からの支援の要請にも的確に応えられる科学館
- (5) 幼児から高齢者までの生涯にわたる科学の学習を支援し、広く市民に学ぶ機会を提供できる科学館

〔基本方針〕

基本理念の実現をめざし、以下に掲げる基本方針のもとに、事業の質の確保と機能の充実に十分に配慮しながら、効率的な事業運営を行います。

- (1) 「自然を理解し、生活を支えていくための科学」の役割を正しく伝えるため、幼児から高齢者まで多くの市民の方々に親しんでいただけるよう、わかりやすい展示や企画を行います。
- (2) 地域の貴重な財産である標本や資料の収集・保管に努め、調査研究を通じて科学的事実を体系化することによって、知識として社会へ還元できるよう努めます。また、このような学芸機能を強化するために、大学や研究機関との連携を深めるとともに、計画的な人材育成に努めます。
- (3) 展示内容については、時代の要請に合わせて常に見直しを行い、「見て・触れて・ためす」参加体験型展示の充実を努めます。来館者が展示のコンセプトを驚きと感動を持って受け止め、実験や観察を通して科学により親しみをもってもらえるようホスピタリティの向上に努めます。
- (4) 最新の科学技術情報や科学館の事業内容をわかりやすく情報発信できるよう努めます。また、

子どもたちの様々な疑問に答えられるよう職員の人材育成を図ります。

- (5) 郷土仙台の豊かな自然環境を活かし、自然観察会などの開催を通じて自然と触れ合い、自然から学ぶ機会を提供します。
- (6) 子どもたちの興味や関心を高めるための教材開発や授業開発を行い、実証的・実験的な理科教育を行う場となるよう努めます。また、高い専門性が要求される理科の特質を考慮し、理科教員の研修の場として、また、資料センターとして教育現場の期待に応えられるよう努めます。
- (7) 生涯学習の視点に立ち、市民の多様なニーズに応え、広く利用者に親しまれる運営を行います。特に、児童教育を通して親の知的好奇心へも対応できるよう努めます。また、知の循環型社会実現のために市民の持つ潜在力がボランティア活動などを通じて社会全体に還元できるような場の提供を目指します。
- (8) ミュージアム都市仙台を支える基盤のひとつとして、地域社会、社会教育施設、学校、博物館、大学や専門機関、企業など、社会の諸部門と連携し相互に高め合い、成長し続ける（進化する）ことで社会的要請に応えます。
- (9) 科学館協議会の助言のもと、科学教育の場として、教育的配慮と科学的専門性に裏づけられた独自性を持った特色のある活動を進めます。